父　　焼津市遺族会　鈴木一子

父の事を書こうとしても私は何も知らない、どんな声、どんな体格をしていたのか全然分からない、写真で見るだけだから…。とても話し好きな元気な人のようでした。

父は大正元年 11 月 15 日生まれ、昭和 19 年 12 月 13 日ニューギニアにて戦死、33 歳の短い生涯でした。家業は漁業で、小さいながら船持で幸せな幼児期を過ごすも、13 歳で父が死亡、母とも離別、家の倒産にて叔母の家に居候していたようです。母との結婚は昭和七年、これを期に独立、私が生まれたのが昭和 16 年 5 月。結婚して 9 年目の初子、喜ぶ間もなく私の生後 60 日目に出征。どんな気持ちで出征したのだろうか？母や親類の人達にもっと聞いておけば良かった、ほとんどの人が故人になってしまいました。

母、本人、戦友からの手紙から推測するに、昭和 16 年 7 月頃に出征する時は、まだまだ気持ちに余裕があったのではないか。私が生後 4 カ月頃、大阪より外地へ出征するから面会にと周囲が騒いでも、母が乗り物に酔うからと連絡がなく、母が聞きつけて私を連れ大阪まで面会に行ったそうです。これが最後の別れとなり、母はあの時行って良かったと言っていました。その後月 1 回程度の手紙が来るも、すべて横須賀郵便局経由検閲済、どこで何をしているのか。ただ、元気だから安心してくれ、一子は大きくなったか、歩くようになったか、親類が私の初節句を祝ってくれ有難かった、子供を他人に笑われぬよう愛し育ててくれ等、在り来たりの文面ばかり。

戦後、パラオまで行動を共にした戦友からの手紙にて、昭和 18 年 7 月 20 日頃数十名ニューギニア天野小隊に編入。この頃になると戦局が思わしくないと肌で感じ、パラオに仕事でいた従兄弟にアルバムを託した、今も家に保存してあります。戦友はパラオに踏みとどまり別れてしまい、お互い音信不通。パラオも内地との連絡が昭和 19 年 5 月初めより音信不通になったそうです。ましてニューギニアの音信は皆無に等しかったと想像します。

母が食糧もなく、財布に入れようとした蛇の抜け殻を見て驚き怒る人が、南方でどう暮らしたのか、可哀想でたまらないと言った言葉を思い出します。この戦争は何だったのか、戦友の手紙も、帰国しても家族は離散しなかなか立ち上がれずにいたとか。私達親子二人家屋敷こそ残ったけど、他は何も無く、母の頑張り、苦労、嘆き悲しむ姿を見て私は育ちました。

今、孫達が父の年齢となり、それぞれの悩みはあるだろうけど、自分の愛、希望も言えず、国の言うがままに出征し、戦死した父達を思うにつけ、戦争は

どんな理由があろうとも絶対にいけないと声を大にして言いたい。

焼津と戦争と私　　**焼津市遺族会　松永安子**

昭和 16 年 12 月 8 日太平洋戦争に突入した日本、次々と勝ち軍（いくさ）を進めている頃は焼津の地も我が家も懐かしい良き時代でした。

戦いが進むにつれ私の廻りでも出征していく人、戦死の悲報が入る家など多くなり、戦地に軍需工場にと駆り出され人手が不足して来ました。

そんな 19 年夏、私六年生の時の事です。我が家は糀屋、だが父に当時駅前にあった㊢（かくさん）精麦で手伝ってほしいと話があり、未経験な仕事に不安もあった様ですが、手伝う事になりました。そして幾日か過ぎた日父の事故を知らされました。精麦のベルトにシャツの袖が巻きつき、右の腕がねじれ肉はちぎれ骨の一部がかろうじて繋がっていたと聞きました。

松永外科に入院した父、その腕は骨もあらわに楔で止めてありました。暑さで化膿しないよう氷で冷やし続け、目をおおいたくなる様な痛ましさでした。

その頃より焼津でも警戒警報が発令される様になった時期でもありましたから、幼い子供を留守番に父の付添いをする、母の心情は大変なものであったろうと思います。

長女の私と妹二人、3 歳の弟と広い蚊帳の隅に、肩よせ合い眠った心細かった日々が思い出されます。

食糧も不足して来た時でもあり、糀の注文は少なくなって来てはいましたが、それでも金山寺味噌の大豆炒り、金山寺の具を切ったり、米とぎなど子供の私には大変でしたが、学校から帰ってくると、母の手伝いをした日々が思い出されます。

涼風の立つ頃、父が退院して来ました。節削りの達人でもあり、その腕を自慢していた父の右手は、一生曲がらない不具の手となってしまいました。

そして戦禍は、ますます激しくなり都会の母恋しい年頃の子供達が、集団や縁故で疎開してくる様になり、私のクラスにも、東京から 2 人転校して来ました。

そんな激動の年も改まり、20 年 2 月静浜航空基地が機銃掃射を受け、近くの民家も大変な被害を受けたと聞きました。

又辨天に爆弾が落ちた日、初夏の昼下がり突然大音響と共に地がゆれた。駅の近くの人は列車が脱線したと思い、表に飛び出したと言います。1km 先の家も振動で窓ガラスが割れ、爆弾の落ちた所はすり鉢状の大きな穴と化した。そ

の威力のすごさにびっくりもした。

昭和 20 年 5 月 19 日午前 10 時頃、米機Ｂ29 が越後島、下当間地区に爆弾 18 発を投下した。

その内の 2 発が朝比奈川左岸に着弾し、大きな穴が出来爆弾淵をつくった。被爆により、成人男女と下校中の六年生男子 2 名の尊い命が犠牲となった。又、家屋田畑などが大きな被害を受けた。

そんな時でも子ども心は怖さより、警戒警報で早退となる事の方がうれしくて道草をしていると、空襲警報が鳴り慌てて家に帰り防空壕にとびこんだものです。

20 年 6 月ある大雨の日、防空壕の冠水を防ごうと、母が室(むろ)の屋根に材木を取りに上がり足を踏み外し右手骨折、父と母二重苦になってしまった。

戦争という大きな禍の中で、誰もが禍に巻き込まれながら生きて来た時代です。日毎に戦争は激化して来ました。

6 月 19 日あの静岡大空襲があり、両親は子供だけでも安全な所で眠れる様にと、私と妹近所の子供 10 人程を、石脇の山の家に避難させてくれました。防空頭巾を肩にかけ線路伝いに歩いていく途中、空襲警報となり近くの川に滑り下りた。防空頭巾を川に落として大泣きする子もあった。2 時間かけてやっと山の家に着き、五右衛門風呂に入(はい)れて、涼しくゆっくり眠れた事が最高にうれしかった。

そんな数日後、焼津の町に焼夷弾が落とされ、多くの家が焼けました。

今回その時焼夷弾で被災した方から、当時を思い出しながら話を聞かせていただく事が出来ました。

「忘れもしない、7 月 28 日の夜の事、その日は成田山の祭日でもあり土曜日であった。明日家の大事な物を疎開しようと荷物をまとめ、リヤカーも借りて来てあった。灯火管制でもあり早めに子供を寝かせた。その時爆音がしてＢ29 が低空で来た。みんな隣組の防空壕に避難したが、私は赤ん坊が水ぼうそうだったので、家で無事を祈っていた。その時は偵察機で無事だった。やれやれと子供を家に寝かせた、ぐっす
りと眠りにつきどの位たったか、バリバリと音がし外も騒がしい。

海の方から焼夷弾を落としている、何言う間もない、空から油の付いた火の筒が降ってくる、私は家を守らにゃならん、背負った児にぬらした防空頭巾をかぶせ、川の水を汲んでバケツリレーをしたが、そんな事無駄だった。火は地をなめ家の屋根にも、火の玉がはぜて飛び散った、暗黒の空をまるで仕掛け花

火の様に、次々にはねて燃えた。もうこれまでと我が家を後に川を渡り避病院の方へにげた。背中の児が泣き出した。『泣かすとそこに爆弾が落ちるぞ。』と廻りの人にどなられた。

朝家に帰って見れば、吉井金物店から服部ガラス周辺、横町新地の十五軒もの家が焼けてくすぶっていた。

着の身着のまま裸足の５人の子供をつれ、乞食の様な格好で石脇の在所に辿りついた。一晩泊めてもらったが、どこも苦しい時だったから歓迎されず、やっかい者だった。仕方なく近くで三晩野宿した。夜こっそり在所の畑から大根を抜いて来た。それを知った母(かあ)さんが、ふびんに思って畑にそっと食べ物を置いてくれてあった。涙の出る程うれしかった。

それでも６人の胃袋を満たす事が出来ず、よそのごみ箱の中まであさったよ。悪い事は続くもんでの～。子供の一人が日本脳炎になってしまい、食べる物も着せる服さえない。近所の人に胴着をもらって、やっと避病院に入院させる事ができた。

夫は徴用船で戦死するし、男手のない惨めさを、とことん味わったよ。私が悪い訳じゃない、戦争が悪い、生きる力も尽き死のうと思い線路に座ったが子供が不憫で出来なかった。それでもやっと、六畳位の鳶(とび)の小屋に入られ雨だけは凌(しの)げた。高等科だった長男に漁船に乗って働いてもらった。焼け跡に芋も植えた。生きて行かにゃならんもんね。生きる為に食糧の買い出しにもいった。高洲の知り合いへ行った時の事、その家でお米を二升もらい、尊いお米だから乳母車の底にかくし、野菜をのせ帰る途中、大富の駐在前まで来たら駐在に大事な米が見つかってしまった。『おいてけ』と言う。駐在が鬼に見えたっけ事情を話し泣いて頼みやっと許してもらった。

数かぎりないどん底生活と苦しみは死ぬまで忘れないよ、あれから 50 年、父を知らない子も 51 になった。だがの～子供等も、戦争中の苦しかった話をしても聞こうともしてくれないよ、あんたに聞いてもらって少しはすっきりした。」と寂しそうに言われました。私も話を聞くまではあの辺に焼夷弾が落ちた位の事しか知りませんでしたが、大変な苦労をなさった人がいる事を今回知りました。

又焼津神社の西側、鰯ケ島にも落とされた。鰯ケ島でも火熱で焼けたじゃがいもを、皆で食べたと聞きました。

「ほしがりません勝つまでは」と少年も少女も学徒動員や軍需工場で働かされた。プロペラ作りや防毒マスク作りをしたと言います。

家族の元を離れ県外まで行った少年少女達、国を挙げて軍の仕事に従事しました。

運命の 8 月 15 日暑い日でした。親から母の在所に行く様言われ、私達姉妹は照りつけるほこりの道を一里半も歩いて北新田の家に着きました。小田原の従兄も疎開して来ており、大はしゃぎとなった。そんな時叔父がきびしい声で、「皆ラジオの前に座れ。」と言う。私達子供は何かわからなかったが、大人にならって神妙に座った。ラジオから初めて聞く天皇の声、

「たえがたきをたえ。」の玉音放送でした。子供心に何となくではあるが、日本が負けて戦争が終わったんだ、と感じましたが悲しみはありませんでした。

戦争は終わりましたが、食糧や物不足は続き焼津でも大半の家が、豆かす、こうりゃん、芋の粉など食べられる物は工夫して食べたと聞きました。我が家は商売上、その様な思いをしませんでしたが、醤油や味噌など調味料も何一つ無い時代です。

海水を汲んで来て、主食となるすいとんの味付けにしたが、にがくてまずかったとききました。

私の家にも近所のおばさん達が、大豆の茹で汁をもらいに来ていたのを思い出します。海水にまぜて使うと、少しは醤油らしくなった様です。

日本は急速な高度成長時代となり、何でも手に入る生活、飽食の時代と言われる今、戦争を知らない親と子の世代となり、物の尊さ、親子の絆、思いやりなど希薄になって来ています。

戦争で夫や父を亡くした人、家を焼かれた人、当時は福祉もボランティアもなかったと思う。でも一生懸命生きた人々、自分達の力で生きるしかなかった。焼津でも戦争体験者が高齢化し、当時の焼津を語ってくれる人も少なくなりました。

平和の尊さを忘れてはならない、二度と繰り返してはいけない戦争を、語り継ぐ事の大切さ、私の中でも薄れゆく記憶をたぐりながら記しました。

そして戦後 77 年の今思う事。世界中の人々がコロナと言う目に見えない敵と戦っている、命をおびやかされ、生活が破壊され不安な日々を過ごしている、世の中が安心安全になってゆく為には、それぞれの体験を語り伝えて行かなければと思います。